

News
letter

噴火灣文化

[Funkawan Culture]

2007.12 Vol.3

Date City Institute of Funkawan Culture

伊達市噴火灣文化研究所

■インタビュー「*Fieldworker*」

【考古】「世界が注目する縄文文化と噴火湾」

國學院大學教授 小林 達雄…………… 3

■研究報告

【年代測定】「炭素年代測定とはなんだろうか」

総合研究大学院大学日本歴史研究専攻博士課程
伊達 元成…………… 6

■研究動向

【アイヌ】「アイヌ文化研究の現状—噴火湾沿岸のアイヌ資料」

北海道立アイヌ民族文化研究センター研究課長
古原 敏弘…………… 8

■学会発表要旨

【考古】「伊達市有珠4遺跡—近世アイヌ民族の墓の調査」

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉…………… 11

■研究スタッフ紹介・事業案内・次号予告…………… 16

表紙

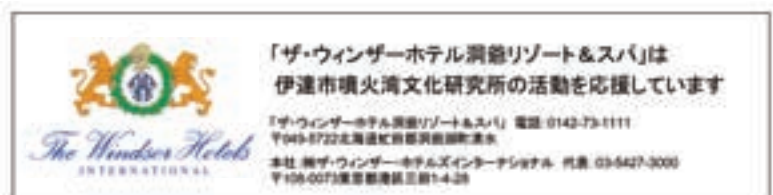
「鋼の心」

撮影・解説：粟 島 暁 浩

受賞歴 平成 18 年 第 39 回道美展新人賞

weblog http://blog.goo.ne.jp/hiro_photo72/

鞆（ふいご）で勢いを増す炎の中の鋼。赤く染まる頃合いを計っては取り出し、手槌を振るい鍛え上げる。伊達市黎明観刀鍛冶工房を主宰する渡辺惟平刀匠。人間国宝の宮入行平師（故人）に入門し、昭和 54 年の作刀承認を機に独立。新作名刀展に 10 度の入選を果たす。伊達市文化伝承者の一人でもある。刀匠の鉄を打つ力強い槌音はきょうも工房に響き渡る。「宮入一門の技術をこの地に根付かせたい」。鋼の心で伝統文化を守り続ける 58 歳。



Fieldworker

【考古学】

「世界が注目する縄文文化と噴火湾」

國學院大學教授 小林 達雄 氏



こばやし・たつお
國學院大學教授。
1937年11月生まれ。
新潟県長岡市出身。
國學院大學大学院博士課程修了。著書:「日本原始美術大系I 縄文土器」、「縄文文化の研究」他。

第三回目の「**Fieldworker**」は、縄文文化研究の第一人者で、世界的な考古学者である小林達雄先生です。小林先生は、伊達市北黄金貝塚や洞爺湖町入江・高砂貝塚、今金町美利河遺跡の史跡整備委員長として、噴火湾沿岸の遺跡の保存と活用に尽力されてきています。

世界に縄文文化を紹介し続けている先生に、世界的視野で見た噴火湾の遺跡について、そして考古学を志したきっかけなどについて伺いました。

◆史跡整備委員長である洞爺湖町入江・高砂貝塚の整備の取り組みは？

遺跡には、時代や地域といった背景をもとにした個性がある。その個性を表現できるのが一番いい。つまり、その時代の息吹が感じられるような、あるいは、たたずまいが感じられるような整備がよい。

伊達市の北黄金貝塚は原点に帰って、遺跡の個性を表に出したために全国でも注目されてきている。

入江・高砂貝塚も、ここでしかないものを出す必要がある。まずは見た目が大事。高砂川の水辺の樹木や、水の上のところに水棲生物がいて、生の営みがある。これを、手をかけながら復活させて、人間の生活舞台としての環境を復元していければいいのではないかと。

◆美利河遺跡や鷲ノ木遺跡など噴火湾沿岸の遺跡にも関わっていらっしゃいますね

縄文時代において貝塚は表看板の一つです。貝塚が集中する地帯は、九州・瀬戸内海沿岸・東海地方・関東・仙台湾・三陸・噴火湾くらいしかないのです。とても大事。貝塚は、ここで繰り返された人間の歴史を典型的に表している。また、縄文人が生活を展開した中で、ストーンサークルは並みのものではなく、それなりの個性を表現したものです。景色としてまとまっている。こういうものは世界遺産に持っていきような内容を持っている。

◆世界遺産ですか!?

いま、世界的に縄文は注目されている。これまで

効率主義で、進歩と思っていた生き方が、歴史上かつて無いような負担を地球にかけてきた。さらに、それを止めるという方法を身につけずに、声だけ「危機的な状況だ」と叫んでいるだけ。縄文文化のように、かくも自然と共生した文化・時代に対するノスタルジアみたいなものが、世界的に意識されている。例えば、ヨーロッパならケルト文化、新大陸ならアメリカ先住民の文化なのです。

トーテムポールを作ったアメリカ先住民の文化も農耕を持たないで、自然と共生して生きてきた。彼らについては人類学者が相当な記録を残しており、レベルの高い内容がはっきり示されている。一方、縄文文化は土中に残されたものしかなく、はっきりと内容はつかめていない。しかし、150年の研究の積み重ねにより、土器づくりは世界に先んじて行なわれたことがわかっている。

文化的な高い、低いは一概には言えないが、少なくとも文化的要素はどっちが豊かかといえば縄文なんです。ケルト文化やアメリカ先住民の文化よりも豊かな内容を持っている縄文文化に、今、熱い視線が注がれているのです。

縄文の舞台としての噴火湾は、実は世界、人類の歴史の中で注目すべき舞台ということになる。縄文の典型、あるいは代表は、世界の文化の代表の一つなんです。

このような、しっかりした文化の認識を持っていれば、世界遺産に対する動きにしても、国際的にすぐに応じられる。縄文に対する視線は、海外の方が熱い。日本人は、空気みたいにいる。縄文土器や貝塚は知っているが、その価値を人類史全体の中で位置づけることについては無頓着です。

噴火湾の貝塚文化は、本州北部のストーンサークルと絡めながら世界遺産に持っていくくらいの力は持っている。それを、みんなで認識する必要があるんじゃないだろうか。自分の顔は自分で見ることができないのと同じですね。

◆先生が考古学を志したきっかけは？

小さい時は「科学少年」でした。学校から帰ると勉強しないで、トンボだとか魚だとかを相手にしていた。ただ、相手しているだけではなく、意識して自然を見るようにな

った。「科学少年」というのは、学問的世界があるのだということに目覚めた時、それに関心を寄せるのが科学少年なんです。

僕は、まず昆虫少年だった。図鑑を人から借りて、ポロポロになるまで調べるんです。それが小学校5年です。

次は植物少年になった。6年生の一年間だった。いい先生がいて、教えてもらった。標本づくりもした。

5年生頃の教科書に浜田青陵（耕作）の書いた縄文時代についての国語の教科書があって、はじめて、縄文土器や石器があることを知った。実物を見たいと思ったが、当時は博物館もない。しかし、心には残っていた。

「考古学」という学問がそれに関わるということはその時は知らなかった。ところが、同じクラスのライバルの一人が「考古学」という名前を知ってたんですよ。びっくりした。僕はガキ大将の一人だったので、いろいろなことを知っていたし、先頭たって暴れていた方なのに、自分の知らないことを知っていたということで、ちょっとショックを受けた覚えがある。

この時に教科書で読んだ「貝塚」だとか「縄文時代」に対する思いがずーっと残って、心の中に沈殿していたのです。

中学生になって、新入生を囲んでの座談会があって、将来何になりたいかを聞かれた。私は小学校でいい先生に出会ったもんだから、あんないい先生になりたいと思っていたんですけど、ほかの人も「先生」と言うもんだから、「考古学」を研究したいと言った。すると、先生が「そんな希望はだめだ。『世界一の考古学者になりたい』と言わなければ」と言われて、僕は言ってもいないのに、「世界一」と書かれてしまった（笑）。恥ずかしかった。

でも、挫折もあったんです。夏休みの自由研究というのがあって、考古学でやったんです。長岡市にある国指定史跡の藤橋遺跡についてですけど。その頃、長岡市立科学博物館に通っていて、その研究をやりました。市内の自由研究発表会の代表になったけれども、担任は、僕のじゃ足りないと思ったらしい。担任は理科の先生だから、僕の考古学が研究じゃないと思ったんです。そこで先生は、僕のライバルに、岩石からクロムが取れるとかの「顔料の研究」を全部手取り足取りでやっていて、僕はそれを横目で見ている。いよいよ長岡市の発表の場に行ったら僕は落選で、そいつが通ったんです。それで、ひねて、もうやめたと思った。で、一度考古学をやめたんです。

◆それは中学の時ですよ？

そうです。のめり込んで、そういう事件があって、もう誰も評価してくれないと思って、やめたんです。

実は、僕の出身中学に南中学文化賞というのがあって、僕は考古学でその賞を取ったんです。その時に拾っていた土器や石器なんか捨てちゃったんです。カッカして!負け方が悔しくてね。

その後、高校では文学少年だった。卒業が近くなったころ、みんなが受験勉強している中で僕も行きたいと思って、親父に頼んだら行ってもいいと言ってくれた。それから家の田んぼは売られていくんですけどね（笑）。

そこで、何をやるかという時に考古学が残っていた。あらためて、やる気になった。そういう経緯ですね。だから、単純じゃないんです。

◆影響を受けた先生は？

一人は中村孝三郎さんですね。中学の時、長岡市立科学博物館によく通いました。最初は入館料も払わなきゃならなかったんですが、そのうち中村孝三郎さんという人がいると知って、たずねて行くうちにタダで入れるようになって、それからは暇さえあれば行ってましたね。

高校では、廃部寸前の地歴部に入って、3年のときに新入生を勧誘する演説やって、数名しかいない女の子の一人が来てくれて、非常にハッスルしてね（笑）。考古学に鞭を入れる一つになったんですね（笑）。文化祭の発表にも中村先生が来てくれて写真を撮ったのが残ってますね。その後、大学に行きましたが、私の根っこは中村孝三郎さんの長岡市立科学博物館ですね。

◆大学では？

大学に行って、1年生の夏休みに中村さんに報告に行った。しばらくして、昼近くになると、悠久山という山をトコトコ登ってきた白髪の老人がいて、それが山内清男（考古学者）だったんです。名前は知っていたけれども、山内先生に初めて会った。本ノ木遺跡（新潟県中魚沼郡津南町）の発掘にこれから行くところだった。中村さんが、「お前すぐ鞆持ちで行け!」というから、発掘についていきました。その時に初めて、中村孝三郎先生のほかに先生と呼べる恩師に出会えたのです。

もちろん國學院大学にも先生がおられたけれども、「考古学だけは、しばらくしたら俺は負けないぞ」という不遜な思いを抱く輩でしたから。その中で、頭の上からないのが山内清男でした。

山内先生には大変お世話になりました。しかし、何一つというのは語弊があるが、具体的に考古学について教わってはいないんです。どちらかというと、腰元のように

すぐそばにおいて、ちょっとでも行かないと電話や葉書が来るんです。そこで、行って、「先生、何か御用でしょうか」と聞くと、だまーって聞こえない振りをするんです。つまり、「顔を見せないじゃないか」といいたいんですね。まあ、しょっちゅうそういうことがありましてね。

ただその頃、内心忸怩たる思いがあったのは、古い時代のことが好きだったので旧石器のことを知りたかったことでした。しかし、國學院には何も無いし、教えてくれる人もいないから、芹沢長介（考古学者）のところを訪ねたんです。明治大学のね。で、『駿台史学』に先生の論文があるから、それが欲しくてね。訪ねて、「芹沢先生の書いた論文が欲しい」というと、「もうあれは無い」と言われ、それからは全部手写しですよ。

芹沢先生が明治大学を出られた頃、僕は学生だったので、しょっちゅう電話して、来てもいいと言うと行ったんです。今でも、電話番号を覚えています。で、行けば新しい情報を聞いたり、お母さんの手作りのご飯をご馳走になったりしていました。僕は、大学は違うけれども、芹沢長介が行う発掘の小頭だったんです。

だから、最初の出会いは中村孝三郎で、その次は山内清男で、その次が芹沢長介なんです。

◆山内清男と芹沢長介というと、旧石器を巡る論争の当事者ですね

そのうち、芹沢と山内は対立していくんです。僕は両方に行ってるから辛くてね…。で、山内清男も知ってるんです。芹沢のところに行ってるってね。それがとても辛くてね。コウモリみたいな思いをしてね。*

お互いに反目し合っていたけれども、山内と芹沢、特に芹沢からすれば、山内先生を研究者としてダメだというわけではないんですよ。今日はその話はしないけれども、いろんな理由があって離れたから…。

◆話は変わりますが、ご趣味は？

何でも集めること。子犬みたいに集めるのが好きですね。新潟県立歴史博物館で、友の会が毎年一回「マイ・コレクション・ワールド」といって、会員のコレクションを持ってきて展示するというのをやっていて、私はずっとそれに参加しています。墨壺、鏡もあります。そのほか、北アメリカ北西海岸インディアンのシルクスクリーンは、個人として持っているコレクションでは、たぶん僕が一番だと思います。

イギリスに行った時は土日に骨董市があるのでしょっちゅう出かけ、集めましたけど。一番、誇るべきものはストーンヘンジ関係ですね。たとえばストーンヘンジの絵葉書だったら、イギリスにいるマニアには勝てないけれど、外国にいる人では僕が一番でしょう。整備の状況がわかりますよ。つかえ棒があったりね。

あと本ですね。ストーンヘンジの載っている本は全部集めている。あと、ミュージアムグッズね。世界のあちこち行った時のミュージアムグッズを結構集めている。

ある人が嗅ぎつけて、展覧会やりたいからって、僕のところに借りに来るんですよ。



◆最後に、今後の夢をお聞かせください

縄文を世界に発信したい。外に向かっては縄文の発信。そして代表的なものは世界遺産に持って行く。それから、内にある縄文文化をもっと自分で解釈したい。最近書いたものには言葉のことを書いていますが、縄文人が言葉を操っていたということを入れて縄文文化のモノを見てみたらぜんぜん違うんです。たとえば、家というものは、我々考古学者だったら、家の大きさとか、プランだとかを気にするけれども、「家」という言葉があるとすれば、家の「内」とか「外」とかそういうこともあるはず。縄文土器も、土器の形や模様があって、土器はどういうことを意味しているのかということを知りたいですね。

これからの考古学として、「考古学離れの考古学」を提唱している。形や文様の変遷だとか、分布だとかいうのではなくて、模様なら「物語があるんじゃないか」ということを考える。だから、北海道から関東まで同じ模様が使われるのは意味があって、名前が付いているということ。考古学的な分析はもうやめた。たとえば、地方論とか言語学だとかを見てみたい。そうすると縄文文化が解ける。縄文人も言葉を使っていたという前提にモノを見ればわかるんですよ。注口土器が形として、新しいフォルムとしてあるということだけではなく、「これはどう社会の中で意味を持つのか」とか、そういうことを考えないと注口土器が出てきたり、無くなったっていうのはあまり意味を持たないですよ。まあ、そんなところです。

※ここで小林先生は目頭を押さえ涙ぐみます。かつての情景が頭に思い浮かんだのでしょうか。なお、先生はその後、渡辺仁氏（東大）、佐藤達夫氏（東大）のお話をされましたが、紙数の都合上、割愛させて頂きました。

「炭素年代測定とはなんだろうか」

総合研究大学院大学日本歴史研究専攻博士課程 伊達 元成

突然ですが、あなたの年齢を教えてください。そう聞かれたときに、自分の年齢はすぐに答えることができると思います。たとえちょっと迷っても、「えーっと、私は昭和23年1月2日の生まれだから…」というように生年月日から現在の年齢を計算することもできます。それは自分が生まれた誕生日の正確な情報をなんらかの形で持っているからです。住民票や保険証や免許証にも生年月日が記載されていますので、その情報さえあれば、ずばり年齢を計算することができます。

では、誕生日がまったくわからない時はどうしましょう？多くの人が見た目で年齢を当てる事に失敗しているように、見た目で年齢を当てることほど危険なことはありません。そこで年齢を求めるために何か別の方法が必要になります。

考古学や歴史学では年代を測定する方法として、炭素14年代法がたびたび用いられるようになってきました。今回は、この年代測定法についてご紹介いたします。

■ここにも炭素 あなたにも炭素

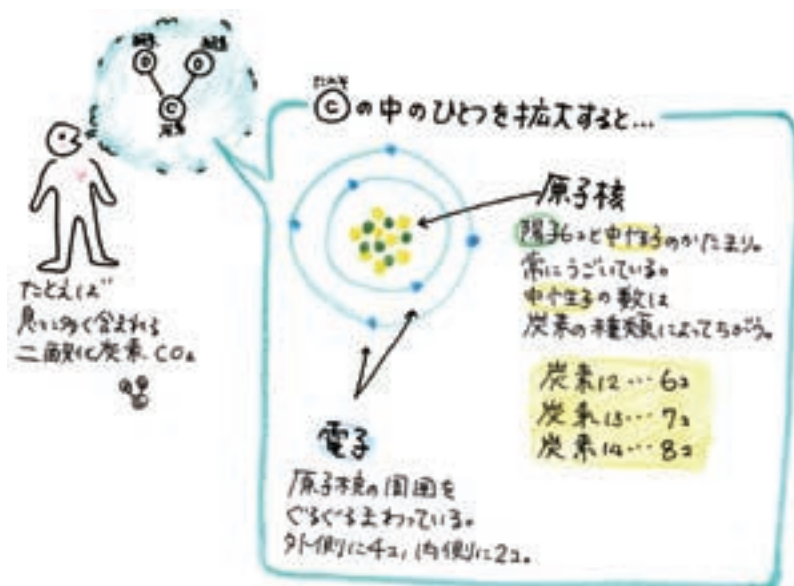
炭素という言葉は一度は聞いた事があると思います。炭素たちは化学的に全く同じ性質なので普通の生活の中では全く見分けがつかいません。このような物質を炭酸飲料に入っているシュワっとする二酸化炭素、鉛筆の芯の原料、ダイヤモンドも炭素からできています。しかし、炭素には3つの種類があるのをご存知でしょうか？ちょっと難しくなるかもしれませんが、ここから少しだけ化学の話になります。

私たちの身の回りにあるすべての物（物質）はさまざまな種類の原子の集合体で作られています。たとえ

ば、わかりやすい例として、二酸化炭素（ CO_2 ）は1つの炭素原子（C）と2つの酸素原子（O）で構成されています。さらにそれぞれの原子を拡大してみると、原子は電子と陽子と中性子で構成されています。そして、陽子の数で酸素なのか炭素なのか、はたまた他の原子なのかが決まっています。

さて、炭素は6個の電子と陽子を持っているのですが、中性子の数が違うことで3種類に分類されています。陽子6個と中性子6個でできているのを炭素12（陽子の個数+中性子の個数）、同じく陽子6個と中性子7個でできているのを炭素13、そして陽子6個と中性子8個でできているのを炭素14といいます。普段なにげなく使っている炭素にはこのように3種類の炭素があります。

3種類もの炭素があったのであれば、炭酸飲料に入っている二酸化炭素や鉛筆の芯の炭素はどの炭素？と疑問に思うことでしょうか。じつは、この3種類の炭素たちは化学的に全く同じ性質なので普通の生活の中では全く見分けがつかいません。このような物質を化学の言葉では「同位体」といいます。つまり、中性子の数が多いか少ないかということ以外、化学的に同じ性質なので二酸化炭素の場合ですと、 $^{12}\text{CO}_2$ 、 $^{13}\text{CO}_2$ 、 $^{14}\text{CO}_2$ 、というような状態で私たちのまわりの空气中に存在しています。そして植物は光合成によりこれらの二酸化炭素を体内に取り入れ、葉や果実を作り、動物がさらにそれを食べて栄養とすることで筋肉や骨を作っています。私たちの体も野菜を食べたり、草食動物の牛や羊の肉を食べたりすることで、栄養素に含まれる炭素を間接的に体に取り込んでいて、私たちの体の中には骨や筋肉などを構成する素材の一つとして炭素が存在しています。





■かわりモノの炭素 14

3つの炭素のうち、炭素 14には他の炭素と違い、ちょっと変わった性質があります。それは、「放射線(β線)を出しながら、ある時間をかけて窒素原子にその形を変えていく」、というものです。この時、もともとあった量が半分になるまでに必要とする時間を「半減期」と呼び、炭素 14の半減期は 5730 ± 40 年であることがわかっています。この半減期は温度や圧力など周囲の環境に左右されず一定なため、土の中でも水の中でも規則的に起こります。地球の大気中では炭素 14が生成される量と崩壊する量とがほぼ保たれている状態にあります。つまり、過去も現在も炭素 14の濃度は一定であった、と考えることができます。

私たちは生きていくために食べものを食べ、体の中で栄養を取り込み、エネルギーとしたり骨や筋肉を作ったりしています。食べ物の中には、炭素を含んだ栄養素があるため、食べ続ける事により常に新しい炭素を体の中に取り込んでいることとなります。では、死んでしまったらどうなるでしょう。ご飯を食べることができなくなってしまうので、新しい炭素は取り込まれず、すでに体の中に骨や肉の材料として固定された炭素 14は半減期 5730 ± 40 年の速度をもって徐々に崩壊し減っていきます。つまり、死んだ生物の中の炭素 14の量が半分になるのに 5730年、さらに半分の 1/4になるのに 11460年、さらに半分の 1/8になるのに 17190年の時間がかかるのです。

年代測定はこの残った炭素 14を精度よく計り、元あった炭素の量(世界標準試料の炭素)と比較し、その減少にかかった時間をもとめることで、年代を知ることができます。

■海の恵み 測定の敵…

伊達市の遺跡は、その多くが海岸線に集中しています。今は海岸から離れたところに位置している北黄金貝塚も当時の海水面の高さを考えれば、海岸に近いところで生活していたことがわかります。そして、それらの遺跡からたくさんの魚の骨や鯨やオットセイの骨が見つっています。これは当時そこに住んでいた縄文人たちが海の恵みに支えられていたことを示しています。きっと豊かな噴火湾で採れた魚介類が毎日食卓に並んでいたことでしょう。これだけたくさんの骨が見つければ、骨をつかった年代測定もたくさんできて正確な遺跡の年代が求まる！と思いたいのですが、炭素 14年代測定の側から見ると、「海洋リザー



ある日の夕食 すべての食材に炭素がふくまれています

バー効果」というちょっと厄介な問題があります。海水は大海原をととてもゆっくりとしたスピードで長時間をかけて循環しています。その流れにのって海水に溶け込んだ二酸化炭素も循環しますが、そのスピードは大気の循環と比べて非常に遅く、海洋を循環している炭素は大気中の炭素に比べると古い年代のものとなっています。海洋生物は海水に含まれたこの古い炭素を食物連鎖により摂取しているため、鯨やオットセイなどの海洋生物が示す年代はどうしても古くなってしまいます。さらに、それを食べた人間には古い炭素が体に取り込まれ、人間の骨の年代測定を行うと本当の年代よりもはるかに古い年代を示してしまいます。これでは正確な年代を求める事ができません。そこで海洋リザーバー効果を補正するという方法を考えなければなりません。噴火湾の周りにはそれぞれ個性的な遺跡が数多く見つっています。おそらくそれぞれの遺跡では生活様式も集落ごとに異なることから、食べ物による影響を考慮する必要があります。また、火山灰の情報や地質学などの情報を上手に組み合わせる事でより精度の高い年代測定を行うことが求められています。

さて、普段なにげなく食べているおいしいご飯の中にも炭素が含まれています。その炭素はどこから来て、どう体に取り込まれていくのか。よく考えてみると食卓にも人体と地球規模のロマンが広がりますね。

「アイヌ文化研究の現状—噴火湾沿岸のアイヌ資料—」

北海道立アイヌ民族文化研究センター 研究課長 古原 敏弘

■はじめに

北海道内の多くの市町村の博物館、郷土館、資料館には、アイヌの生活文化に関する道具（アイヌ民具）が収蔵されている。それらの施設は、昭和40年代以降に設置された新たな施設が多く、資料の多くも、その際に収集されたものが多いと思われる。

しかし、そうして収集されたアイヌ民具には、製作・使用年代や使用地、収集地といった背景情報（バックデータ）がない資料が多いため、それらの収集資料を用いての地域のアイヌ民具の変遷や地域差を解明するなどの研究対象となりにくかった。実際にアイヌ民具を用いた研究は、現在でも少ないのが現状である。

ところが、海外の博物館には、資料の収集年代、収集地などのバックデータを持つアイヌ民具資料が所蔵されていることが知られ、1980年代からドイツを中心に所在調査が始まった。その後、アメリカ、ロシアと調査が行われ、2001年のサハリンの調査まで約20年間にわたって海外の博物館で調査が行われた。

その調査の大きな成果として、海外の博物館には、主に19世紀末から20世紀初頭（第1次世界大戦まで）にかけての北海道、サハリンで収集された約13,500点にもおよぶアイヌの生活用具が所蔵されていることが判明した。また、これまで日本国内には資料の少ないサハリンアイヌの資料が増えたことが上げられる。

噴火湾地域の資料についても、海外でのアイヌ民具資料の調査で、ヨーロッパやアメリカに収蔵されていることが判明している。

現在は、その海外での調査の結果から、国内資料にない製作地や制作年代などの情報を付加するための比較研究を行うために、北海道内のアイヌ資料の調査が行われている。

ここでは、これまでの海外の調査や、北海道内での資料調査の結果から、噴火湾地域のアイヌ資料の所在や内容について紹介し、あわせて、噴火湾地域のアイヌの物質文化研究の現状を紹介する。

■噴火湾沿岸のアイヌ資料

噴火湾の海岸線には、古くから多数のアイヌコタ

ン（集落）があったことが知られており、この地域で製作された民具の中でも、衣服には特徴があることが知られている。しかし、そのほかのアイヌ民具については、資料が少ないこともあり、研究は進んでいない。

1 伊達市内の資料

・有珠善光寺資料

善光寺の資料約100点には、衣服、漆器、弓、イクパスイ、刀などのアイヌの民具としてよく知られているものが含まれている。資料の多くは漆器、イクパスイを主とする儀式用具である。その中の衣服資料3点の特徴は、後述のバラートシ資料と比べてみると興味深いものである。

また、衣服以外の資料としては、織機の部品などは、この地域の資料と考えられる貴重な資料であるが、残念なことに、この織機で織られたアトウシが残されていない。

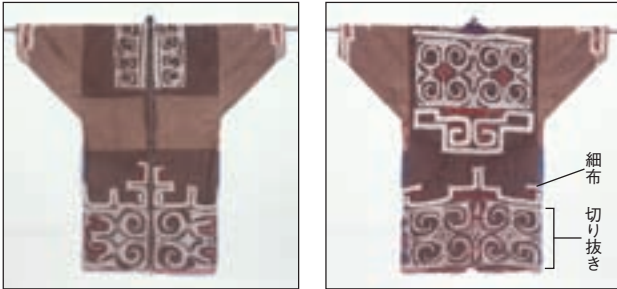
この3点の資料を比較してみると、大小の端切れを接ぎ着物を作り、その上に、細長いベルト状に加工した布を用いて文様を施すことは共通している。

違いとしては、文様がベルトだけのもの（資料1）、切抜き文様のあるもの（資料2.3）、縫製の糸が、イラクサだけを用いるもの（資料1）、イラクサの糸と木綿糸の両方を用いているもの（資料2）、木綿糸だけのもの（資料3）とがある。



資料1

襟を施した木綿の縦縞の着物に背、裾、袖口、前身頃に文様を施す。文様は白木綿布をベルト状に加工したものを主に用いるほか、一部に赤色のものを加えている。縫い糸はすべて撚りのないイラクサの糸を用いる。裾を三つ折りで縫いとめるなど丁寧な作りの着物である。



資料 2

茶の縦縞と無地の端切れを接ぎ、紺の縦縞の生地で襟付きの着物として、背・裾と前身頃に切り抜きで文様を施し、さらにその周囲に細布で文様を施す。裾は平縫いで折り返しが無い。文様の一部は絹布である。縫糸は大部分が木綿であるが、一部に撚りのないイラクサの糸を使用している。



資料 3

紺の縦縞の生地に文様のある生地を接ぎ、背と裾に切り抜き文様を施し、さらにその周囲に細布で文様を施す。縫糸は木綿糸を使用している。

この細長いベルト状に加工した布を用いて文様を施す着物は、噴火湾地域で作られた衣服とされており「ルウンペ」と呼ばれるものである。また、この着物は裾が付けることが多いのも特徴となっている。

・有珠4遺跡

伊達市内では既に有珠オヤコツ遺跡など何箇所かのアイヌ期の遺跡が発見されている。中でも昨年からの発掘の行われている有珠4遺跡の墳墓の副葬品、中でも刀鞘などは伝世品と直接比較が可能なほど保存状態がよいものであり、墳墓の形成年代が火山灰との関係で明確なことから、アイヌ民具の年代を考える上で貴重な資料となるものである。

2 伊達市周辺の資料

伊達市内の周辺の噴火湾沿岸の市町村にもアイヌ

民具資料の存在や、噴火湾地域で収集されたと思われる資料の存在が知られてきている。

・ピリカ会資料

ピリカ会とは森町の村岡格が明治末から大正にかけてアイヌ文化研究を目指して組織したものである。このピリカ会は当時の噴火湾地域のアイヌの状況を撮影し、絵葉書を刊行したほか、各種の民具を収集して展示も行っていった。当時日本を訪れた外国の研究者なども、北海道を訪れた際には村岡を訪ねていることが研究者の記録にも、村岡の記録にも残されており、その名は広く知られていたようである。

ピリカ会の資料収集には、村岡と親交のあった八雲町落部に居た弁開胤次郎が大きく関係しており、その収集資料は落部のコタン周辺を主とするものと考えられる。また、ピリカ会の活動年代などから、これらの資料は1920年代に収集された資料と考えられる。道南地域では、もっともまとまったアイヌ民具資料といえる。

このピリカ会の収集した約300点の民具は、村岡が松前藩の藩医の家だったことから、現在は松前町に寄贈され、松前城資料館に収蔵されている。また、ごく少数であるが七飯町、八雲町などにも残されている。

弁開胤次郎に関しては、八雲町の落部八幡宮に、アイヌ語を刻んだ石碑や、銀婚湯に金糸でアイヌ模様の刺繍を施した半纏なども残されている。

・豊浦町所蔵資料（佐茂資料）

豊浦町内（辺部）の民家の解体の際に発見された資料で、漆器を主体に約200点のまとまった資料である。着物どの資料は含まれていないが、イナウやキツネ頭骨、サパウンペなど儀礼具が含まれている。イクパスイ 1点には豊浦市街の裏山から見た洞爺湖中島、羊蹄山、ニセコ連山を立体的に彫り、漆をかけたものなど地元でしか作りえないものが含まれている。また、組になる多量の漆器の椀、盆、膳など、アイヌ民具として残る漆器の流通経路を考える重要な資料と考えられるものである。これらは豊浦町の指定文化財となっている。

その他にも、長万部町教育委員会には、昭和40年代に地元で収集した資料約40点が所蔵されており、一部は町民センターで展示されている。八雲町内の権久家に伝わっていた資料約40点が市立函館博物館に収蔵されている。

これらの資料については、まだ詳細な調査は行われておらず、今後噴火湾地域のアイヌ民具の地域的特徴を導き出すための比較研究の対象となる資料である。

3 海外資料

・ヨーロッパ

バラートシ・バログ (1870～1945) はハンガリーの人類学者で1914年にドイツのハンブルク市立民族学博物館の依頼により、北海道とサハリンで資料の収集を行った。その収集した資料のうち約300点がハンガリーのブタペスト民族学博物館に所蔵されている。ブタペストに所蔵された資料については1999年に調査が行われ内容が判明しているが、資料収集の依頼元であるハンブルク市立博物館の資料約500点が未調査であり、その収集資料の全容は明らかになっていない。また、収集の足跡を示すものや、収集地の記録も今のところ見つかっていない。

このバラートシ資料に含まれる衣服には、サハリンで作られたイラクサ製のもの1点のほか、木綿の衣服が5点含まれている。

その5点の木綿の衣服の施文の特徴として、端切れを接ぎ合わせて着物に仕立て、細いベルト状に加工して文様を施しているもので、5点とも縫糸はイラクサの撚りのない繊維を用いているなどの特徴があり「ルウンペ」の範疇に入るものである。前述の有珠善光寺の資料1とも類似した資料である。

おそらくは、バラートシ・バログが訪れ、資料を収集した場所の一つが有珠であったことを示す資料と考えられる。

・アメリカ

噴火湾地域のアイヌ資料で、これまでに判明している資料には次のようなものがある。

1900年、生物学者のバシュフォード・ディーンは噴火湾北沿岸や胆振・日高で収集を行った。この資料は現在アメリカ自然史博物館に収蔵されている。

1901年、アメリカの医師、ハイラム・H・ヒラーは小谷部全一郎、白井柳次郎らの協力で資料を収集している。この資料は現在ペンシルバニア大学考古学人類学博物館に収蔵されている。両者とも、自然科学の研究者として資料の背景情報を残したことに

特徴がある。また、両者の収集資料のうち、約100点に噴火湾地域の地名がある。

・ロシア

ロシアの資料調査では、噴火湾地域の資料はほとんど確認されていない。

しかし、ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵の資料中の、千島収集とされる衣服は噴火湾地域で作られたものと考えられるものがある。羽織を再利用し、細いベルト状に加工した木綿布や絹布を用いて文様を施してあり、「ルウンペ」の範疇に入る資料である。縫い糸もイラクサを用いている。

これまで、アイヌ民具に関しては、バックデータのない資料が多く、時代性や地域性を考慮せず、アイヌ民具というひとくくりで扱われてくることが多かった。

海外から始まったアイヌ民具資料調査と、それに続く道内での資料調査で、資料の所在や概要が判明してきており、アイヌ民具の歴史の変遷や地域差研究へのデータが飛躍的に増えている。海外資料との比較などから、アイヌ民具の研究が進むものと考えられる。これらの研究にとって、今後、噴火湾地域は、道北、道東などの道内各地と本州の間であって、民具資料の歴史の変遷や地域差の比較研究にとって重要な地域となると思われる。

■参考文献

- ◎市立函館博物館 1979『蔵品目録 -1- <民族資料篇>』
- ◎APb- アイヌプロジェクト調査団編 1998『ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録』草風館
- ◎古原敏弘・ヴィルヘルム = ガボール編 1999『ブタペスト民族学博物館所蔵 バラートシ バログ コレクション 調査報告書』北海道立アイヌ民族文化研究センター
- ◎小谷凱宣編 2004『海外のアイヌ文化財：現状と歴史』(第17回「大学と科学」公開シンポジウム発表収録集) 南山大学人類学研究所
- ◎北海道立アイヌ民族文化研究センター 2005『ピリカ会関係資料の調査研究』
- ◎小谷凱宣・荻原真子編 2004『海外アイヌコレクション総目録』南山大学
- ◎児玉作左衛門・伊藤昌一 1968『アイヌ服飾の調査』『アイヌ民俗資料調査報告』北海道教育委員会
- ◎福田茂夫・高橋理・古原敏弘 2005『豊浦町所蔵のアイヌ資料』『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 11号』北海道立アイヌ民族文化研究センター
- ◎木立大忍・木立真里・福田茂夫 2006『善光寺資料総目録』善光寺

「伊達市有珠4遺跡—近世アイヌ民族の墓の調査」

伊達市噴火湾文化研究所学芸員 青野 友哉

2007年12月15日に北海道大学で開催された北海道考古学会遺跡報告会での発表要旨に加筆修正したものを掲載します。

有珠4遺跡は、有珠優健学園跡地に養護老人ホームを建設するために、当研究所が事前に発掘調査したものです。2006、2007年の2カ年の調査では縄文時代中期(約4,000年前)から近代までの遺構と遺物が発見されました。

そのなかでも、23基もの近世アイヌ民族の墓がまとめて発見されたことは非常に珍しく、保存状態の良い人骨や副葬品の出土により、多くの考古学的情報を得ることができました。

今回は、発掘調査により明らかになった近世アイヌ文化期(本州は江戸時代:約400~140年前)の墓の構造と遺体の埋葬の仕方、性別による副葬品の違いなどについて紹介します。

さらに、約340年前の有珠のアイヌ民族が「墓地概念」を持っていた可能性が指摘できることから、明治時代以降の民俗学的な聞き取り調査ではわからなかった、近世アイヌ民族の死生観と他界観を考古学的に究明する必要があることを述べました。

■近世アイヌ墓の概要(時期・構造・人骨)

2カ年で約2,000㎡を調査した有珠4遺跡では、近世アイヌ文化期の墓が23基発見された。

墓の時期は17世紀に降った有珠山(1663年・Us-b)と駒ヶ岳(1640年・Ko-d)の2つの火山灰により3時期に区分できる。時期ごとに墓を集計すると表1のようになる。

2つの火山灰に挟まれたⅡ期の墓は、作られた年代が23年間に限定できるという極めて稀な例で、しかも、その数は10基もある。これらは今後、村の人口規模の把握や、血縁関係、婚姻関係など、村がどのように構成されていたのかを知る上で重要な資料となる。なぜならば、この10基の墓の被葬者どうしは実際に会ったことのある、あるいは

血のつながりのある人々である可能性が極めて高いからである。

墓の構造は、地面を長台形や小判形などに掘りくぼめ、掘った土を穴の周りにドーナツ状に積み上げた形である。遺体を入れた後に墓穴は埋め戻されるが、平坦になるように軽く土をかけた状態である。

また、遺体頭部側の墓穴外には直径約20cmの柱の穴が9基の墓から見つかっており、墓標が立っていた痕だと考えられる。

このドーナツ状に土を積み上げる構造と墓標の存在は、そこに人が埋葬されていることを生きている者が認識するための作り方といえる。

次に人骨と副葬品について記す。墓のほとんどには人骨が残っており、副葬品も伴っていた。人骨を形質人類学的に調べると、性別や年齢、生前に煩っていた病気や死因もわかることがある。これらの鑑定は現在、東京大学大学院理学系研究科(人類学教室)の近藤修准教授に依頼中である。

一方、考古学的には、副葬品の種類から性別を判断できる。田村俊之は千歳市末広遺跡で人骨と副葬品がともに残存している例から、男性と女性では副葬品の種類が違うことを示している(田村1983)。

これは墓とその埋葬行為が極めて文化的なものであり、規制にのっとって行われていることによる。つまり、「入れなければならないもの」、「やらなければいけないこと」などが決まっており、そのとおり行われなければ、死者にとっても生者にとっても不都合なこととなると考えていたということである。

これらを基に、今回の発掘調査では表2の出土遺物によって性別を判断した。その結果、男性14(うち幼児1)、女性8(うち幼児2)、不明1となった。

副葬品を見ると、中柄なつかえ以外は主に本州で用いられ

表1 時期別の墓の数

時 期	遺 構 数
I期: 1640年以前	10基
Ⅱ期: 1640~1663年	10基
Ⅲ期: 1663年以降	2基

※1663年以前だがKo-d火山灰との関係が不明なもの1基あり

表2 男女による副葬品の種類の違い

男性用と判断したもの	エムシ(太刀) 中柄(弓矢の柄と矢尻をつなぐシャフト)
女性用と判断したもの	タマサイ(首飾り・ガラス玉・銭・銅鏡) 鉄製針・ナタ・カマ・鉄鍋
男女共用	マキリ(小刀)・ニンカリ(耳環)・ キセリ(煙管)・漆盆・漆椀

ていたもの、あるいは当時のアイヌ民族の好みに合わせて本州で作られたものである。彼らが宝物と考えたものや日用品の大半が、交易で入手したものであることがわかる。それと同時に、死後の世界、あるいはその世界へ行くまでの間も、生前使用していた道具が必要であると考えていたことがわかる。

■木棺・木槨の痕跡が確認できた墓（20号墓）

今回の調査で最も特筆すべきことは木棺・木槨構造の痕跡の発見である。これは木棺（木製の棺）、あるいは木槨（土中の穴に遺体を入れる部分だけ木製の板で囲った構造）を用いた墓の存在を示している。これまでも、余市町大川遺跡迂回路地点P-41号墓で2.8×2.8mの範囲でクリの板材が組み合わされて出土した例がある。ただし、今回の例は墓坑内が「緑色堆積物」（現在分析中の粘土ないしは火山灰）で満たされていたため、人骨と副葬品の残りが良く、埋葬時の状況が復元可能という点が特筆される。

この20号墓は緑色堆積物中に幅約1cmの黒色土のラインが長台形に囲むように見られた（写真1）。

長台形の内部にも緑色堆積物は存在し、掘り下げると肋骨が立体的に残るほど状態のよい人骨が出土した（写真2）。このことから、長台形のラインは木棺あるいは木槨構造の壁面であり、腐食して黒色土に置き換わったと考えられる。その規模は、長軸175cm、長辺（頭側）53cm、短辺（足側）32cm、高さ18cmである。底板の痕跡は確認できなかったが、蓋の痕跡は断面で観察できた。蓋は陥没し、屈曲したものと思われる（写真3）。

墓穴は、木棺・木槨構造の外側（人骨の右腕側）に幅17cmの拡張部分を持っており、ここに漆碗・漆盆・エムシが副葬されている。しかも、漆碗は漆膜だけでありながら、半球状を保っており、漆盆も縦に入れられた状態のまま、縁まで立体的に遺存していた（写真4）。これは副葬品が、半固形状の緑色堆積物で隙間なく充填されていたためと思われる。

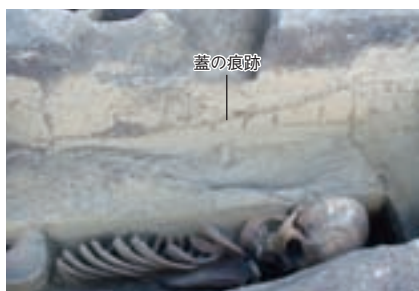
なお、蓋の陥没具合から判断して、緑色堆積物は、本来蓋の上や拡張部に流し込まれたものであり、木棺・木槨構造の内側へは隙間から偶然入り込んだ可能性が考えられる。偶然入り込んだことで板の痕跡が残り、木棺・木槨構造の存在が明らかになったの

である。ということは、痕跡が消えていく墓穴が他にもあるということでもある。それらを見つけ出す方法を考えてみた。

■なぜ口が開いているのか？

人骨の出土状態を観察すると、口が開いているもの（写真5・6・8）と閉じているもの（写真2）があることがわかる。奈良貴史（国際医療福祉大学准教授）は遺体が白骨化するまでの環境の違いにより、人骨が移動する程度に違いが生じるとしている（奈良2007）。

遺体に直接土をかけた「充填環境」では、腱や靭帯といった軟部組織が腐敗しても、その部分が土に置き換わるために骨の移動が少ないが、棺の中や石室に置かれただけの「空隙環境」では軟部組織の腐敗により骨が動いてしまうという。空隙環境で動きやすい部位は、主に下顎骨・胸郭・背骨・寛骨（骨盤）・股関節・膝蓋



木棺・木槨の痕跡が確認できた墓〔有珠4遺跡20号墓〕

写真1（左上）：木棺・木槨の痕跡

写真2（右上）：充填環境の人骨と副葬品、

写真3（左下）：蓋の痕跡（斜めの黒いライン）

写真4（右下）：充填環境に残った漆盆と漆碗

骨(皿)・手足などである。

つまり、口が空いているように見えるのは、初めから口を空けて埋葬されたのではなく、遺体の周りに空気がある状態で靭帯が腐ったために、下顎が下に落ちた結果なのである。さらにいうと、口と骨盤が開き、ひざの皿が外れている人骨は、全身が空隙環境だったと考えられ、痕跡はなくても棺状のものに入れられて埋葬されたと判断できるのである。

ただし、骨が動いていない人骨のすべてが棺状のものに入れられていなかったとは言い切れない。先の20号墓のように、偶然に板の隙間から緑色堆積物が入り込み、軟部組織の腐食する前に充填環境になった場合もあるからである。

また、奈良は、伊達市ポンマ遺跡1号墓(写真5)を例にして、下顎骨～寛骨までが動き、膝蓋骨が動いていない場合を、キナ(ゴザ)などに包まれて置かれ、その上から土を被せて埋葬されたものと想定している。つまり、キナに包まれることにより、キナと密着する部位と隙間となる部位が生じるからである。ここではこのような例を「部分的空隙環境」と呼ぶことにする。

このような観点で14号墓を見てみよう(写真6)。人骨は、下顎骨・胸郭・骨盤・膝蓋骨と、全身にわたって動いており、明らかな空隙環境といえる。しかも、漆盆・漆椀・マキリ・中柄の出土状況から、本来縦に副葬されていた漆盆が、遺体側に倒れ、同時に中柄が散乱した状況が見て取れる。つまり、14号墓は20号墓と同じ木棺・木槨構造と副葬品を置く拡張部を持っていたことがわかるのである。

■出土遺物への応用

今回の調査で、人骨から明らかに空隙環境・充填環境と判断された墓の遺物を観察した結果、遺物にも環境により違いが現れることがわかった。

例えば、充填環境にある漆器は、内部の木質が腐食し、表面の薄い膜のみであっても、縦に入れられた漆盆は原形どおりに縁部分と底面が垂直の状態にあり、漆椀は伏せられた状態で、変形せずに半球状を保っている(写真4)。

一方、空隙環境にある漆器は、本来立体的であった漆椀が潰れ、太腿上に存在した漆盆の大半は飛散して原形を留めていない。この状況は、木棺・木槨構造により、空隙環境にあった漆器が木質の腐食した段階で外から土砂が流入し、飛散したと考えられる。つまり、漆器の「木質」部分は、遺体の「腱・靭帯」に相当し、各環境下で腐食後に生じる現象は遺体の場合と同じなのである。

このように、遺物についても同じ理論で説明できることから、人骨の全体部位が遺存していない墓でも判断が可能となる。さらに、人骨と遺物の双方を組み合わせることで、より複雑な墓の構造の解釈も可能になった。

■Us-b 火山灰中の「ひび割れ」が示すもの

当遺跡では、調査区一面に約50cmの厚さでUs-b火山灰が堆積している。墓の上に覆っているこのUs-b火山灰の断面を観察すると、「ひび割れ」と断層が見られる場合がある(写真7)。これは、Us-b火山灰が堆積した後に墓の内部が陥没したことを示す。



写真5 キナに包まれた人骨
[部分的空隙環境]
: ポンマ遺跡1号墓



写真6 空隙環境の人骨と拡張部から倒れた副葬品
: 有珠4遺跡14号墓



写真7 火山灰中の「ひび割れ」と断層: 有珠4遺跡10号墓

墓内部の陥没は充填環境の遺体が腐食した場合でも起こりうるが、より顕著に表れるのは、木棺・木槨構造の場合である。これは遺体や副葬品の他に空気の容積が加わっているからである。

事実、ひび割れと断層が見られる墓 4 例は、すべて人骨・遺物から見て木棺・木槨構造による空隙環境であったと判断されている。

■墓が作られて埋まるまで

人骨と副葬品の出土状態と、土層断面を丁寧に観察することにより、墓がいつ、どのように作られ、どうやって埋まったかを明らかにできる。

具体例を示すと、10 号墓は墓穴に成人男性が副葬品を伴って埋葬されている墓である（写真 8）。構築時期は 2 つの火山灰との関係から 1640～1663 年に限定される。人骨は下顎骨が下方にずれていることから空隙環境か部分的空隙環境といえる。遺物の観察では、頭骨から胸骨上にある漆器は、いずれも扁平に潰れており、漆盆の縁の一部が飛散している。このことから、遺体及び漆器は軟部組織と木質が腐食するまで空隙環境にあったといえる。また、遺体の右上腕骨近くに中柄が束のまま出土しており、中柄は充填環境にあったことが確認できる。よって、この墓は遺体と副葬品（中柄・マキリ・キセリ）の間に側板を持つ木棺・木槨構造であったと判断できる。

埋葬の過程を復元してみる。まず墓穴が掘られ、棺に入れられた遺体が中に入れられる、あるいは墓穴の中で組み合わされた箱状の構造物に遺体が安置される。漆器とエムシは木棺・木槨構造の中に、矢筒に入った矢、マキリ、キセリは外に置かれる。次に、木棺・木槨構造の上をわずかな土砂で埋め戻す。この時にはすでに蓋がされている。その後、墓坑内の有機質の腐食が進行中のある段階で、Us-b 火山灰が降下し、墓穴上とその周



写真 8 空隙環境の人骨：有珠 4 遺跡 10 号墓

表 3 墓の構造と梱包方法別の遺構数

墓の構造	梱包	遺構数
I. 木棺・木槨構造を持つ墓		9 基
II. 素掘りの墓	a 無梱包	2 基
	b キナ	3 基
III. 掘り込みを持たない墓		1 基
IV. 不明		6 基

※1663 年以前だが Ko-d 火山灰との関係が不明なもの 1 基あり

囲に平坦に堆積する。ある程度、火山灰が圧縮された段階で、木棺・木槨構造の蓋が壊れ、蓋上の土層がそのまま陥没する。この時、空隙環境であった遺体及び副葬品は急激な加重により、一部が移動・損壊したと考えられる。

■近世アイヌ墓の多様性

上記のような観察をすべての墓に対して行った結果、表 3 のような墓の構造が確認された。17 世紀半ばの有珠地区のアイヌ墓には、木棺・木槨構造を持つ墓と、素掘りの墓、掘り込みを持たない墓の 3 型式が存在しており、素掘りの墓には、遺体を直葬する場合と、キナで包む場合の二つの形態があることがわかった。

■文献資料との照合

元和 4（1618）年に松前で布教したジロラモ・デ・アンジェリスの記録にアイヌ民族の埋葬に関する記述がある（児玉 1954）。これによると、「富裕な者は死骸を納める大きな一つの箱を備えて、直ちにそれを埋葬する。貧乏人は一つの囊の中に死骸を入れ、同様の方法でそれを埋葬する」とあるように、木棺あるいは木槨の存在を示す「箱」と、キナを想起させる「囊」という記述がある。

アンジェリスの記述は、今回検討したうちの「木棺・木槨構造を持つ墓」と「素掘りでキナに包んで埋葬する墓」に当てはまる。しかし、有珠 4 遺跡では、「掘り込みを持たずに土で覆っただけの墓」や、「素掘りで遺体を直葬する墓」も発見されているが、これらについての記載はない。このことは、実際の近世アイヌ墓の構造と遺体の扱い方は多様なものであるが、文献記録にはその一部のみが記された、と考えた方がよさそうである。同様に、「富裕な者」、「貧乏人」といった表現が妥当なものであるかも検討の余地がある。なぜならば、今回の調査で小児墓はすべて素掘りで直葬されており、年齢など他の要素が関連する可能性があるからである。これらの違いがいかなる要因によるものであるかは、副葬品の

分析なども含めて今後明らかにする課題である。

■近世アイヌ民族の墓地概念

有珠 4 遺跡における墓と畠の調査は、近世アイヌ民族の墓地概念について考えるうえで、重要な資料を提示できると考えている。

「墓地」とは、死者の遺体を埋葬する特定の場所を生者が認識していることであり、単に墓が集合した状態は墓地とはみなされない。同じ場所に埋葬された墓であっても、時期が異なる場合や、以前に存在した墓を認識せずに作られた場合は、偶然による墓の集合にすぎない。

当時の人々が墓を認識していたかどうかは、畠との重複関係により理解が可能である。畠は 2 ヶ年の調査区の北東側と南端で検出され、墓は調査区の東半分が多く検出された。墓と畠の年代は 2 つの火山灰を手がかりに表 1 のように 3 時期に区分できる。時期ごとの畠と墓の位置を調べると、両者は明確に分かれており、同時期に重複することはない。

また、3 時期を通して見ても、畠に壊された墓は 1 例のみで、他の 22 基の墓はすべて放棄後の畠に作られるか、畠とは重複していないものである。

また、墓の上面はドーナツ状の低いマウンドを持ち、9 基には墓標があるなど、存在を示すことを意識して作られたといえる。つまり、畠は視覚的に認識できるこれらの墓を避けて作られているのである。

さらに、この場所が「墓地」であるかを判断する上で重要な検出例が、Ⅱ期の墓で墓標穴を持つもの 4 基（6 号墓・7 号墓・8 号墓・10 号墓）がほぼ等間隔に直線的に並んでいることである。これは単に墓どうしの重複を避けるためではなく、何らかの規則により個人の埋葬位置が社会的に決まっている可能性が考えられる。つまり、世帯や出自、死順などが、いかに関連するかは今のところ不明であるとしても、次に自分が死んだ場合はどこに葬られるかを生前から自覚し、周囲も了解している可能性がある。

このような解釈が成り立つならば、有珠のアイヌ民族は、少なくとも 17 世紀半ばの段階には「墓地概念」を持っていたことになる。

これまで、アイヌ民族は、墓は作るが「墓地」という概念はないと言われることが多かった。例えば、「アイヌが共同墓地ではなく、森のなかの遠く離れ、隔離された場所に遺体を埋葬する（後略）」（バチラー 1995）といったものである。しかしこれは、明治時代以降の聞き取り調査によるものであり、より古い時期の状況はこれとは異なる可能性があるのである。

近年は中世から近世のアイヌ墓の調査例が増え、

考古学的知見からアイヌ民族の墓地概念について言及できる状況になってきた。本調査の成果も含め、



写真 9 シンヌラッパの様子

幕末～明治期に大きく変容する以前のアイヌ文化について、死生観や他界観も含めて明らかにしていく必要がある。

■シンヌラッパの実施と人骨の保管

最後に、本調査において出土した近世アイヌ文化期の人骨について述べておかなければならない。

発掘調査により出土した人骨は、上記のように記録にほとんど残らない近世アイヌ民族の実態を明らかにできる重要な情報を有していた。また、今後行われる人類学的研究により、さらに多くの情報を与えてくれることだろう。

しかし、われわれ調査者は、人骨がどんなに、北海道やアイヌ民族の歴史を明らかにできるものとしても、それを単に「資料」として扱うわけにはいかない。なぜなら、それらは明らかに人の遺骸であり、340 年前に有珠地区に生きていた人そのものだからである。そのため、調査中には被葬者に敬意を払い、先祖供養の儀式（シンヌラッパ）を行った。

儀式はウタリ協会伊達支部（小野祐照支部長）の主催で、諏訪野義雄祭司により執り行われた。参列者には北海道ウタリ協会加藤忠理事長も同席していただき、伊達市役所職員や老人ホーム建設に関わる人々が参加した。

なお、今回の人骨鑑定は、実習として当初から参加していた東京大学人類学教室に依頼したが、鑑定終了後には札幌医科大学に移し、丁寧に保管されることになっている。

■参考文献

◎児玉作左衛門ほか 1954 「蝦夷に関する耶蘇会士の報告」

『北方文化研究報告』第 9 輯

◎ジョン・バチラー 1995 『アイヌの伝承と民族』安田一郎訳 青土社

◎田村俊之 1983 「北海道における近世の墓制」『北海道考古学』19

◎奈良貴史 2007 「近世考古学と形質人類学」『近世・近現代考古学入門』慶応義塾大学出版会 pp133-146

●研究スタッフ紹介

平成19年5月の人事異動で、新たに加わった研究所スタッフを紹介します。



森田克博

文化課長

今年は、洋画家野田弘志、大藪雅孝、ピアニスト岩崎淑、小説家加賀乙彦、詩人高橋睦郎先生をはじめ多くの方々にお会いしました。毎日が驚きでした。みなさん、魅力いっぱいの研究所にぜひお越しください。



篠原計浩

文化財係長

先史縄文時代から開拓時代へと本市の豊富な文化財に改めて驚いています。文化財事務を担当しています。

■平成18年度に埋蔵文化財専門員として在職した松田宏介氏は、現在、室蘭市教育委員会にて学芸員として勤務しています。

●2007年度事業案内

4月2日～7月13日

有珠4遺跡の発掘調査

ライブカメラによる発掘実況公開も実施

5月3日～11日

「白田祥章展～なじまないもの～」開催

6月5日～10日

「写真家 掛川源一郎の感動」展開催

6月9日

東北大学東北アジア研究センター第1回学術交流連携講演会開催

6月24日

第13回回カムイノミ・イチャルバ祭(有珠)

アイヌ伝統の、神に祈りを捧げる儀式

6月30日～7月8日

佐々木錦堂の世界展(書道展)開催

7月7日

野田弘志展鑑賞バスツアー開催

7月13日

岩崎洸・岩崎淑チェロ&ピアノデュオリサイタル開催

7月14日～16日

岩崎淑ピアノ・室内楽マスタークラス開催

8月2日～6日

伊達家古文書解読夏期集中監修事業

道教育大佐々木教授らが文書解読作業

8月9日～10日

「画伯にチャレンジ」北海道ジュニア美術セミナー

アートビレッジアトリエで野田・大藪画伯らが指導

9月17日

トヨタコミュニティコンサート in 伊達開催

9月19日

文化講演会「フェルメールの世界」開催

9月22日

第2回縄文の森収穫祭開催

史跡北黄金貝塚公園の縄文の森の木が実を付けた事を祝い、縄文スクスク森づくりの会が開催

10月20日

美術館の裏側探検バスツアー開催

10月30日～11月8日

シャーマンコレクション展、「おたき北海道陶芸展」歴代入賞作品展、画家「野本醇の世界」展開催

11月16日

加賀乙彦・高橋睦郎文学フォーラム

3月15日～16日

第6回伊達市文化財ボランティアフェアー

●トピックス〔研究所の後援ほか〕

6月2日～4日

大雄寺フェスタ2007開催

9月1日～2日

第10回だて噴火湾縄文まつり

縄文シンポジウム、縄文〇×ゲーム、コンサート等実施

9月25日～29日

東アジアむかしの本のものがたり展

9月28日～29日

セミナー 東アジアむかしの本のものがたり開催

10月7日

善光寺フォーラム2007(有珠善光寺)

講演・宝物展・コンサート他実施

10月11日～14日

企画展「アイヌ語地名を歩くー山田秀三の地名研究から」開催

10月13日

「伊達地方のアイヌ語・アイヌ文化」講演会開催

10月26日

仙台神楽保存会が北海道文化財保護功労賞受賞

11月5日

野本醇氏が北海道文化賞受賞

2月10日

東京藝大フィルハーモニア

●第4号予告〔2008年6月刊行予定〕

■インタビュー「Fieldworker」

【絵画】画家・広島市立大学名誉教授 野田 弘 志

■研究報告

【歴史・保存修復】文化庁文化財部美術学芸課文化財調査官

松本 純子

株式会社 半田九清堂 代表取締役

半田 昌規

■評論

【音楽】ピアニスト・桐朋学園大学院大学教授 岩崎 淑

■研究報告

【哲学】旭川大学准教授

信木 晴雄

Newsletter【噴火湾文化】第3号

●編集・発行 伊達市噴火湾文化研究所

〒052-0031 伊達市館山町21番地5

TEL. 0142-21-5050 FAX. 0142-22-5445

E-mail bunka@city.date.hokkaido.jp

URL http://www.funkawan.net/

●印刷 (有)村上印刷

〒052-0026 伊達市錦町95-1

TEL. 0142-23-2625 FAX. 0142-25-2459

2007年12月31日発行